

1人1台端末を活用し家庭学習に取り組むことを前提とした 小学校社会科の単元開発

* Developing a Social Studies Unit for Elementary School, Based on the Premise of Utilizing One Device per Student for Home Learning

渡辺 陽那*・小林 祐紀*
茨城大学教育学部*

本研究の目的は、1人1台端末及び汎用クラウドツールを用いて家庭学習に取り組むことを前提とした小学校社会科の学習単元を開発することである。小学校第5学年社会科「米づくりのさかんな地域」の単元において、授業と家庭学習の連動を意図し、タブレット端末を活用した単元開発を行った。その結果、授業とのつながりと児童の主体性を意識し、学校外の場であってもタブレット端末の利点を活かした単元開発を行うことができた。

キーワード：1人1台端末 家庭学習 持ち帰り学習 小学校社会科

1. はじめに

GIGAスクール構想の実現とはSociety 5.0時代を生きる子供たちに相応しい、誰一人取り残すことのない公正に個別最適化され、創造性を育む学びを実現するため、全ての児童生徒の「1人1台端末」等のICT環境、高速大容量の通信ネットワーク環境を整備することである（文部科学省 2020）。さらに整備された学習環境は、授業での活用とともに、家庭での学習に積極的に活用することが期待されている。しかし現状では、約3割の自治体が端末の持ち帰りに関する方針や計画を策定していないことが指摘されている（文部科学省 2023）。

端末を持ち帰って学習に取り組むことが推奨されている現代であって、子どもの学びは授業だけに留まらず、家庭学習と連動することでより充実できると考えられる。

そこで、本研究では1人1台端末を活用して家庭学習に取り組むことを前提とした小学校の学習単元を構想することにした。なお、家庭や地域における調査等が行いやすい社会科を研究対象とする。

2. 先行研究と目的

2.1. 関連する先行研究

社会科の授業を通し1人1台端末を活用して、児童が発信する情報に責任を持つことを理解すること

を目的に小学校社会科の授業を実践した岩山（2017）は、児童自身が情報の発信者になるという擬似体験を行うことで、自分ごととして捉えながら情報の発信に対する責任について考えることができたことを報告している。したがって授業と関連した家庭学習の設定には、児童が主体的に情報を収集・発信する必要があると考えられる。

小学校社会科においてタブレット端末の活用と情報活用能力の向上の関係について実践を通じて明らかにすることを目指した小林（2017）では、視聴教材（動画教材）を児童の実態に合わせて教材化することで、情報活用能力が高まり、知識理解が深まることを報告している。

さらに稲垣・佐藤（2015）は、小学校算数科において、反転授業を取り入れた実践を試み、家庭学習の理解度に及ぼす影響を明らかにしている。学力が下位群の児童にも一定の知識の定着が確認され、上位群は十分なノートを作成していた一方で、下位群は解き方や自己評価に関する記述が少ない傾向が見られたことを指摘している。

これらから、情報活用能力や個別最適な学びの実現に向けた授業開発を行う必要性を指摘できる。

2.2. 本研究の目的

本研究の目的は、1人1台端末及び汎用クラウドツールを用いて家庭学習に取り組むことを前提とした小学校社会科の学習単元を開発することとする。

3. 単元開発の方法

小学校社会科授業の単元開発にあたっては、①授業と家庭学習を連動させる②どの端末であっても実現可能である③動画教材を活用する④協働で学ぶ場面を取り入れる、の4つの方針を定めた。次に対象学年を第5学年とし、地理分野の内容に定めた。そして単元目標を決定し単元計画を作成する。最後に、開発した学習単元に対して、評価を依頼し指摘された箇所の修正や改善を行う。

評価は、公立O小学校に勤務するA教諭に依頼する。A教諭は各校種の社会科免許状を取得しており、教員歴12年目の中堅教員である。校外研修歴として、令和2年に学校教育情報化指導者研修（独立行政法人教職員支援機構）や勤務校で情報教育主任を務める等の経験を有している。したがって一般の教員以上にICTを活用した小学校社会科の授業の知識と経験があると考えられ、評価者として適任と判断した。

4. 開発された学習単元

開発した学習単元の概要は次の通りである。

単元名 米づくりのさかんな地域
単元目標 生産量の変化、生産過程、人々の協力関係、技術の向上、稲作に関わる人々の工夫や努力を調べてまとめ、国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解するとともに、消費者や生産者などから多角的に考え、これからの農業の発展について、他者と協力して自分の考えをまとめられるようにする。

単元構想（全13時間）

導入・第一次	身の回りの農業	——	2時間
第二次	日本の米づくりの課題	——	1時間
第三次	米づくりの生産と工夫	——	6時間
第四次	これからの米づくり	——	1時間
第五次	まとめCMづくり	——	3時間

次に単元計画の概要を述べる。第一次では、まず導入として家庭学習として家庭で普段購入している米の産地を調査し、その産地の特徴を調べる。次に授業で家庭学習の調査をもとに米の産地を白地図にまとめ、米の産地のイメージを掴む。第二次では日本が抱える米づくりの課題を資料から読み取り、学

習課題を立てる。第三次では、米づくりの生産と工夫を、家庭学習での資料の読み取りや動画視聴、家庭でのインタビュー活動から考える。第四次では、まず持続可能な意味を捉えて、身近な持続可能な取組を調査する。授業で「持続可能な農業」について考え、次時につなげられるようにする。第五次では、これまでの学習を踏まえてまとめ活動を行う。

また家庭学習との連動は、第一次導入部分、第三次第4時間目、第5時間目、第7時間目、第四次第10時間目の5時間で計画している。具体的には家庭でのインタビュー活動、資料から分かったことをタブレットシートに記入する活動、動画視聴である。家庭学習であっても考えを共有できることやスクリーンショットを用いることで自身の考えを補助できることなどタブレット端末の利点を活かした計画を行った。

5. 評価

評価者であるA教諭にご指摘いただいた部分を整理し、単元計画の修正を行った。主に修正した部分として2点述べる。1点目に家庭学習と授業のつながりが見られないことである。指摘に対して授業時間の後半5-10分程度を次時の予告や家庭学習でやる内容ができる時間に当てることで授業との関連を図るように修正した。2点目に単元全体の課題とまとめを一貫していないことである。指摘に対して多面的・多角的な視野から「持続可能な米づくり」について児童が考えるまとめの活動ができるように修正した。

参考文献

- 文部科学省(2020), GIGAスクール構想の実現」と新学習指導要領における情報教育について, https://www.ca.go.jp/policies/council/cepc/meeting_materials_4/assets/meeting_materials_4_201127_0005.pdf (2023.5.21 最終確認日)
- 文部科学省 (2023) 「端末の利活用状況等の調査結果を踏まえた対応について」 https://www.mext.go.jp/kaigis/iryo/content/20230516-mxt_jogai02-000029578_07.pdf (2023.5.14 最終確認日)
- 岩山直樹 (2017) 小学校社会科情報単元における一人一台端末を活用した授業開発—5年社会科「情報化した社会と私たちの暮らしの実践を通して—」日本デジタル教科書学会発表予稿集, 6, 13-14.
- 小林高章 (2016) タブレット端末を活用し、情報活用能力を高める社会科授業, 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 19, 29-39.

日本STEM教育学会 2024年3月 拡大研究会

稲垣忠, 佐藤靖泰 (2015) 家庭における視聴ログとノート
作成に着目した反転授業の分析, 日本教育工学会論
文誌, 39 (2), 97-105.